

撰取不捨の心

一 郷正道

はじめに

—真実心

どうもみなさんこんにちは。授業があつて大変お疲れのことと思いますが、よくこの会にご出席くださいました。

昨年、私はこの同じ席で、大学の校訓であります「真実心」ということについてお話をいたしました。「真実心」とは何かということですが、いささか抽象的で、

わかりにくいと思うんですが、そこで資料として『浄土文類聚鈔』とか、あるいは『教行信証』に引用される言葉をそこに示しておきました。結論的に「眞實心」というのは、「眞實心」＝「慈悲心」ということになるわけです。「眞實心」というのは言い換えまずと慈悲の心だということを、みなさん覚えておいて下さい。慈悲の心というののもっと平たい言葉といえますか、わかりやすい言葉で言うならば、それは「思いやりの心」というふうに言い換えることもできると思います。だから我々の校訓の「眞實心」は「慈悲の心」、あるいは「思いやりの心」ということだと思います。

今の日本の社会において、「思いやりの心」というのが随分欠けているんじゃないかと思うんですね。「思いやりの心」というのはどういう心かと申しますと、相手の立場に立ってモノを考え、行動するという姿勢、その心です。ですから、第三者、相手の方が悩み苦しんでいけば、その相手の悩み苦しみを我がモノとして受け止める、自分のこととしてそれを受け止める。あるいはまた、他者、他人が喜んでいけば、その喜びを同じく私のモノとして分かち合っていくという心、これが「思いやりの心」

だと言つてよいと思います。今日は「慈悲の心」「思いやりの心」というものを、「撰取不捨の心」という言葉でお話してみようと思うんです。

撰取不捨の心

いきなり「撰取不捨」という聞いたことのない、耳慣れない言葉が出てきましたから、たぶん皆さん方は当惑していらっしやると思いますので、初めに「撰取不捨の心」あるいは「撰取不捨の世界」がどんなものであるかということイメージしていただきたいと思います。今から二つの文章を読みますので、一緒にそのプリントをご覧になってください。

—安心していられる世界

「私は、走るのがにがてです。おそいのです。学校で競争したらいつもビリです。きのうもビリでした。家に帰って、お母さんに『またビリやった』といいました。そ

したら、お母さんが、『ビリでもだいじない。ノリコは一生懸命走ったんやろ。それでええんやで。ちよつと言うとかくけど、ビリの子がいるから一等ができるんや。気にせんでもええ。』といました。私は、ホツとしました。私は、お母さんの子どもに生まれてきて、よかったと思います。」

これ、六年生の作文の一節なんですけれども、どうでしょう、皆さんも「私はお母さんの子どもに生まれてきてよかったと思います」としつかり言えますか。そういうふうに見える子ども、そして親自身もこれほどの幸せはないと思います。競争が遅いからだとか、あるいは偏差値が低いからと言って切り捨ててしまうのでなくて、切り捨てられることもなく、そういう存在をそのまま認めてもらえる、そういう眼差しというのが、今の時代に必要じゃないかということを私は特に感じます。その文章の見出しとして「安心していられる世界」という言葉を出しておきましたが、このお母さんの子供さん、小学校六年の子どもが「私はホツとしています」と。そういう言葉の中に、ああ、自分のお母さんはこういうお母さんであったなということがわかつ

棋取不捨の心

て、本当に安心して世界に生きていますね。次の文章、ちょっと長いですが読んでみましょう。

― 護られている、願われていると感じる世界

―― 六華園にA子という十四歳の少女が収容されていた。

六華園というのはですね、かつて東京にあつて、今はなくなつてしまつているかもしれませんが、非行少女の更正施設です。この六華園の園長先生は九條武子さん。この九條武子さんという御婦人はどういう方であつたかと申しますと、西本願寺にありますね、堀川通りに。その西本願寺の第二十二世御門主の大谷光瑞さんという方は大谷探検隊を派遣しまして、非常に素晴らしい大事なもの、遺品を持つてこられた方であります。その妹さんが九條武子さんなんです。歌詠み、歌人であつて同時に社会事業に非常に熱心に貢献なさつた、この九條武子さんが園長として運営なさつていたのがこの六華園という非行少女の更正施設なんです。

——六華園にA子という十四歳の少女が収容されていた。相当な家庭に育ったが、万引きの癖が身について直らない。少し目を離すと園を抜け出て、デパートで万引きをする。自分の心が制御できず、警察官に捕まる。

警察では、「なんだ六華園の不良か」と、ろくに取り調べず、すぐ自動車で送ってくる。そして、またしても万引きでつかまる。A子には非行を犯したという反省はみられず、投げやりな姿ばかり目立った。これが十三回つづいた。

さて、十四回めである。警察から、「またA子がやった。監督が充分でないのだろう。十四回めになる。これでは警察も困るので、園には帰さず、こちらで処置する。すぐに手続をとってほしい」と、強硬な申し入れだ。

緊急の職員会議が開かれ、結局「どうにも手がつかぬ」「とても更生の見込みはない」「警察に渡した方がA子のためだろう」ということになった。

さっそく森川師は書類を整えて園長室に武子夫人を訪ねた。窓辺の机で読書中の夫人に経過を説明し、決裁を求めたが、うつむいたまま何も言わない。説明が充分でなかったのかと、再度くわしく述べたが、なお返事がない。よく見ると、

摂取不捨の心

夫人の目から涙があふれ、開いた本の上に落ちている。

しばらくして、涙をおさえた夫人は、「A子ちゃんは何回しくじったというのですか」と尋ね、「十四回めだったら、どうしても見放さなくてはならないのでしょうか」と、つづけた。森川師は、返す言葉がなかった。夫人はさらに、「こんどA子ちゃんは十四回めと言いますが、思うてみると、私は何回しくじつてきたことでしょうか」と。

森川師は警察へ走って事情を話し、もう一度だけということ、A子連れれて帰った。いつもは途中で厳しく訓戒するのだが、この日は何も言えない。夫人の言葉に触発されて、今は自分の問題になっている。ただ念仏して連れ帰るばかりだった。そしてA子を部屋に入れ、「きょうは何も言わない。いや、言えないのだが、一言だけ聞いてくれ。警察にいて何も知らなかっただろうが、先生は全員が警察へ渡すと言ったのに、園長先生がどうしても見放せぬと言われる。これだけは思うてくれ」と、静かに言い聞かせた。

すると、それまでどんなに論しても涙ひとつ見せなかったA子が、声をあげて

泣きくずれ、「心配をかけた」と、あやまったのである。

かくしてA子は更生し、夫人の世話で嫁ぐ。一周忌法要に子供を抱いて参拝し、思い出をしみじみ語っていたという。

まことの本願の心は、弥陀が「決して見放さない。まかせよ」と喚（よ）びたもう心である。喚ばれてある身と知らされると、自らはかわらざるに、そのとき間違いのない道に入らしめられ、弥陀の心のままに救われていく。A子の更生は、念仏者としての夫人の後ろ姿に導かれてのことだったと、私はいつも趣深く味わっている。（『中外日報』より）

という文章です。これは、ある新聞の記事に載った文章なのですが、ずっと前に読ましまして、そのまま持っていたんです。今読んだこの中に「見放さない」という言葉が三回ほど出てきてますよね。

今ご紹介した二つの文章から、「撰取不捨の心」というのがどんなものなのかというのを、一応皆さん心でイメージしてみてください。それでちょっと面倒くさくな

りますが、「撰取不捨」という言葉がどういふところに出てきているかということも少し検証してみたいと思います。

無量寿仏の光明

まずは、『仏説観無量寿經』というお経の中にこの言葉が出てまいります。紹介してありますそのお経の一文を読んでみます。

無量寿仏に八万四千の相まします。一一の相に、おのおの八万四千の隨形好あり。一一の好にまた八万四千の光明あり。一一の光明遍く十方世界を照らす。念仏の衆生を撰取して捨てたまわず。その光明・相好および化仏、具に説くべからず。

と書いてありますが、大事なことは、「一一の光明遍く十方世界を照らす。念仏の

衆生を撰取して捨てたまわず。」という文言に「撰取不捨」という言葉が出ています。ということですが、一番最初に「無量寿仏」という言葉が出ています。なんだか訳のわからない言葉ですね。それは阿弥陀さん、阿弥陀仏のことです。そして阿弥陀仏には八万四千の相、いろいろな姿があるんですね。仏さんというのは三十二相といつてです。偉大な人に備わった三十二種類もの非常に特色的な身体的特徴があるわけです。たとえば、皆さんがいろいろの、お寺へお参りしては、あるいは博物館で仏さんのお姿を拝むと、頭に毛が巻いてるでしょう、あれを肉髻にっけいつていいいます。あるいは額のところに水晶の玉が入っているでしょう、あれを白毫びやくごうといいます。それから仏さんの体の毛はあれはどっち巻きか知ってる？ みんなあれは右巻きです。左巻きじゃないぞ、右巻きですよ。あるいは目は青、紺碧の色なんです。といった具合に、仏さんと言われるような偉大な存在には、三十二もの特徴があるわけです。ここでは、「八万四千の随形好あり…」と言っていきますね。その三十二の特徴に付随してある二次的な特徴を「随形好」というんです。しかもそれには、「光明あり…」と書いてある。光が発せられるというんです。仏さんというものは光で表される。その光が撰取不捨

摂取不捨の心

という働きとして示されるわけです。いいですか、仏様が光で示される。そして光は摂取不捨という働きを行うという。それをまず頭に入れておいて下さい。

ところで、どうでしょう皆さん。この光明といたら、皆さん方、何をイメージする？ 光といたら。太陽の光、月の光、これ光明だよ。まずすぐわかるのは、闇を照らすよね。闇を照らして闇を除くものだろう。要するに、明るくなる、明るくしてくれることによつて我々に安心感を与えてくれるでしょう。真つ暗の中つて非常に不安だよ。恐怖さえ感じるよね。ところが光が射しているということであんまりいられる。そういう働きが光にはあるでしょう。あるいは、光は、我々の進むべき、進んでいく方向、そういうものを示してくれるはたらきを持つてるよね。さらにもつと言うと、生物学的には、光合成。これは太陽の光がなかつたら光合成はできない。ということ、この光、あるいは熱というものは、我々の命を支えていてくれるというか、命を与えてくれる、そういうものだということも言えるでしょう。光というのはそういう意味でもすごいものですよ。総てのもの原動力になつてるといってもいい。もつと注意すべきことは、太陽の光でも月の光でもいいけど、これは絶

対、平等に世界中を照らすよね。日本だけは照らすけど、アメリカ大陸は照らさないとか、アメリカ大陸は照らすけど、ユーラシア大陸は照らさないとか、そんなことはないだろう。これこそ絶対平等に照らしてくれる。そういうものが光というものの性格でしょう。そこに差別なんてことはないんです。皆さん方のおじいちゃんかおばあちゃんが、朝起きて、太陽が上がってくると、手を合わせて「おてんとう様、お日様」というような言葉を使って、太陽に向かってお辞儀をしているという姿に出会ってませんか？ お日様、おてんとう様といって、尊敬を表す「お」という字を付けて呼んでるよね。ちよつと前までは。今、皆さん方、おてんとう様とかお日様という言葉知ってますか？ そんな言葉遣わないでしょう。ちよつと前までの日本人は、おてんとう様、お日様といって「お」という敬語を付けて呼んで、感謝の気持ちを表わしてきたわけです。朝、太陽が昇ればそこでお辞儀をする。夕方太陽が西に沈んでいけば、やはりその西の方向に向かってお辞儀をした。そういう光景をよく目にしたものです。今はそれがなかなか見られない。非常に残念だと思います。それで今、光明という言葉を出して、光とはどんなものであるかということについてちよつとお話した

攝取不捨の心

んですけれども、「無量寿仏の光明…」、無量寿仏というのはさつき言いましたように
 阿弥陀仏と考えていいんですね。阿弥陀仏の光の働きとして、一つは、「遍く十方の
 世界を照らす…」と書いてあるね。十方の世界というのはどういふところだろう？
 わかる？ 東西南北。その間。それプラス上下。それで十方になる。そういう十方
 の世界を照らすというのは、全世界を照らすということです。光は全世界を照らす。
 それと同時に照らすだけでなく、「衆生を攝取して捨てない…」って言うんです。
 つまり攝取不捨。衆生という言葉は仏教では、生きとし生けるものという意味、とい
 うと、人間だけと思いがちだけれども、仏教ではそうじゃない。命あるものはみんな
 衆生という言葉でくくられる。衆生あるいは有情うじょうという言葉でね。人間だけでなく
 て、動物も植物の命さえも含むわけ。それが生きとし生けるもの。そういうものを対
 象に、阿弥陀仏は光を発して、生きとし生けるものを攝取して捨てないというんで
 す。光でありますから、それをもう少し分析して考えると、体から発する、八万四千
 もの特徴がある、身体的、肉体的な美しい姿、より良い姿から放たれる光のことを身光
 と言うね。それに対して心の光、そういうものをそこに読んでいくわけね。心の光は

どういうものかというところ、「仏説観無量壽經」からの引用で「仏心とは大慈悲これなり、無縁の慈悲をもつてもろもろの衆生を摂す」という、この言葉。これが実は心光にあたるというわけですね。ですから光といっても、目に見える光だけでなくて、見えない光も含まれるわけだ。その見えない光が実は生きとし生けるものを収めとって捨てることがないという。そういう働きをしているというふうに理解するわけです。その次に親鸞聖人の言葉を出しておきました。ここにも摂取不捨という言葉が出ています。

十方微塵世界の 念仏の衆生をみそなわし 摂取してすてざれば 阿弥陀とな
づけたてまつる【浄土和讃】

そういう言葉です。「十方微塵世界…」、これも難しい言葉だよ。十方はさつきお話ししたからわかるよね。「微塵世界…」、といのは、小さい塵ほどのたくさんの世界という意味。十方にはそういうたくさんの世界があるということですね。小さい塵ほど

撰取不捨の心

もたくさんある世界の衆生、生きとし生けるもの、を「みそなわし…」、ご覧なつて、「撰取してすてざれば 阿弥陀となづけたてまつる」というわけです。再三出てくる阿弥陀仏という仏さんのはたらきを、「撰取して捨てざれば」ということで言っているわけです。阿弥陀仏は撰取して捨てない。だから、何故我々が阿弥陀仏を拝むかというと、それは実は、阿弥陀仏という仏さんの働きが、我々衆生、生きとし生けるものを撰取して見捨てないというお方なんだと、だからそこで頭を下げてお参りするんです。いいかな。阿弥陀仏とは何だろう？と思われるでしょうけれども、生きとし生けるものを撰取して捨てることのない、そういう働きを持った仏さんを阿弥陀仏というんです。

撰取不捨という阿弥陀さんの働きは、お母さんによく例えられて説明されるわけです。この撰取不捨ということが、先にご紹介した九條武子さんの言葉とか、また、お母さんの言葉になつて表れます。お母さんの愛情、あの優しさ、それはちょうど阿弥陀仏の心持ち、つまり撰取不捨という阿弥陀仏の働きと同じなんだという受け止め方をするわけです。

さらに慈悲の心、あるいは摂取不捨の心というものの内容をもう少しずつ説明していきたいと思います。そこにいくつかの歌とか詩を出しておきました。その歌とか詩を味わうことによつて、摂取不捨、あるいは慈悲というそういう考え方を理解してもらいたいと思います。

まず最初の歌。これさつきお話しした九條武子さんの歌です。それは、

百人ももたりのそしりは我に火と降るも　ただ一人のなみだにぞ足る

わかるかな、この意味。百人（ももたり）というのは百人（ひやくにん）なんです。百人を言い換えれば非常にたくさんの人。百人の人間がよつてたかつてこの九條武子さんを非難、中傷する、誹謗し、攻撃しようとする。ところが、そういうふうには非難、中傷され、攻撃されている私であるけれども、自分のことを心から見捨てることなく、自分に同情し、自分に涙を注いでいてくれる一人の存在があれば、その一人の人の涙だけで私は充分だ。「足る……」、というのは充分だ、満足だという意味。そう

摂取不捨の心

いう内容の歌です。

武子夫人という方は先ほどもご紹介したけれども、社会奉仕というのかな、社会事業に非常に熱意を持ってあたられた方、でもわずか四十四、五歳でお亡くなりになっちゃうんですね。歌人という才能もあった。ところが家庭生活はかならずしも幸せではなかったようです。そんな状態の武子夫人であったわけです。いわば、絶望状態にあるわけ。その絶望状態にある私に、一人の涙が注がれていたと。それでもう自分は充分だといって、そこから新たな出発点というものが武子夫人には見えてくるわけですね。その次の文章をご覧ください。

石井完一郎といって、我々の学生時代におられた京都大学の、たぶん心理学の先生だと思いますが、その先生が「青年の生と死の間」という書物を出していらっしゃるんです。その本の一節にそこに書いてあるような文章が出ているんです。

私が死んだら心から泣いてくださる人があるということに気づいた人は絶対に死を思いとどまる

という文章です。この書物の中には十五人の自殺をしようと思った人達の体験記というのかな、それを自殺をしないで済んだということがレポートされているわけね。

——私が死んだら心から泣いてくださる人があるということに気づいた人は絶対に死を思いとどまる——。私が死んだら、誰よりもまずあの方が心から泣いてくれるに違いない、あの人を悲しませてはいけないという気持ちになって、絶望か立ち上がっていくというんですね。そこで大事なのは、私一人の死というものを必ず泣いて悲しんでくれる人がいるということね。

最近、若者の自殺が多いよね。何で若者が自殺するんだろう？ 硫化水素とか作って。非常にもつたいないよね。こんな大事な一人一人の命。彼らには、今お話しているように、自分が死んだら本当に心から泣いてくれる存在がいらないだろうね。だから簡単に死んでしまうのではないのかな。だから皆さん方も在学中に、あるいは人生の間に、本当にあなたへの死を悼んでくれる、悲しんでくれるただ一人の人を見付けるように努力しなさいよ。いい、これは大事なことだぞ。もういるかな。君らにはすでに。本当に心から泣いてくれる人がもういますか？ そういう人がいてくれるという

摂取不捨の心

ことが私を支えていてくれるわけだな。そのような例を次から紹介していきましよう。

東井義雄さんという、中学の校長先生までおやりになった方ですが、その人の「支えられてわたしが」という詩です。

支えられてわたしが
東井義雄

ざしきに上がればざしきが

ろうかに出ればろうかが

便所に行けば便所のゆかが

どこへ行ってもどこへ行っても

私を支えていてくれるものがある

そればかりではない

妻も子どもも孫も

有縁無縁の人々も

生きとし生けるもののいのちたちも

石も土も火も空気も

わたしを支えておってください

ああそればかりじゃない

忘れづめのわたしを支えづめに

久遠の願いがわたしを

支えていてください

「支えていてくださる…」、そういう言葉が三回も出てくるよね。この支えていく
れるはたらきが今日お話ししている慈悲ということの内容です。自分を支えてくれるの
は、親とか、兄弟とか、友だちだけじゃないというんです。「有縁無縁…」、縁もなけ
ればゆかりもない人。縁があるうがなかるうが、総てのもの。生きとし生けるもの総
て。しかも、「石も土も火も空気も わたしを支えておってください…」、というんで
すね。普段我々は毎日毎日生活をしていて「当たり前」だと思っているけれども、火

摂取不捨の心

がなければ、あるいはもしも空気がなかったら、水がなかったら、もうその瞬間にこの私の命はないよね。その尊さを我々は案外忘れがちだね。それによって初めて私の私が支えられているんだなあというね、そういう思い、どうです。そんな思いを皆さん方、普段から持つてる？ 持つてなかったらね、今日を限りに、そんなことにちよっと目を向けてごらん。「ああそればかりじゃない 忘れづめのわたしを支えづめに 久遠の願いがわたしを 支えていてくださる」、考えてみるとね、私の命は無限の過去の昔から、ずっと、しっかりと生きろよ、頑張つて生きなさいよという、そういう願いのもと、脈々と繋がってきた命。その一つの命が今の私だということでしょう。私が、私が、と言っていますけれども、この私はこの世に存在していた、わずか三十五年、あるいは五十年、平均寿命の八十年…だけが私の命だと思つたら大間違いだ。私の命というけれど、今の私の命があるのは、無限の過去から脈々と繋がっているそういう命の連続、繋がりによつて、初めて今の私はこうして在らしめられているのだという、そういう受け止め方だね。これ皆さんお分かりでしょう？ この私を支えていてくれるという働き、それが慈悲というものの内容になるわけですね。

その次は高見順という作家の『帰る旅』という、その詩をご覧下さい。この高見順さんというのは食道癌で亡くなっていかれた作家ですね。亡くなる前に『死の淵より』という詩集を出したんですが、その『死の淵より』に出ている一つの詩です。

帰る旅 高見 順

(一)

帰れるから

旅は楽しいのであり

旅の寂しさを楽しめるのも

わが家にいつかは戻れるからである

だから駅前のしょう、からいラーメンがうまかったり

どこにでもあるコケシの店をのぞいて

おみやげを探したりする

攝取不捨の心

(二)

この旅は

自然へ帰る旅である

帰るところのある旅だから

楽しくなくてはならないのだ

もうじき土に戻れるのだ

おみやげを買わなくていいか

埴輪や明器のような副葬品を

明器という言葉は聞き慣れない言葉じゃないかと思えます。これは死んだ後にお墓へ埋ける副葬品として模型を作るわけね。それを明器というんです。中国では唐の時代にこういうことが盛んだったそうです。だから死ぬ時に、埴輪だとかこういういろいろな器物を一緒に葬ってもらったと言われる。

(三)

大地へ帰る死を悲しんではいけない
肉体とともに精神も

わが家へ帰れるのである

ともすれば悲しみがちだった精神も

おだやかに地下に眠れるのである

ときにセミの幼虫に眠りを破られても

地上のそのはかない生命を思えば許せるのである

(四)

古人は人生をうたかたのごとしと言った

川を行く舟をえがく水脈を

人生とみた昔の歌人もいた

はかなさを彼らは悲しみながら

口に出して言う以上同時にそれを楽しんだに違いない

心捨不取撰

私もこういう詩を書いて

はかない旅を楽しみたいのである

人生は旅だというふうによく喻えられますよね。この高見順も自分の人生、癌でやがて死んでいく、まもなく死んでいく自分の人生を旅になぞらえているわけですけれども。高見順さんの場合は、ここに書いてあるように帰っていく場所というものがつきりしてるんです。自分なりに納得しているんです。その旅が終わってどこへ帰っていくか。わが家へ帰って行くんですよ。皆さん方も旅に出るでしょう。その時どうだ、二泊三日なり、あるいは三泊四日なりの旅を終わってね、帰って行く場所があるから安心して旅ができるだろう？ 二泊三日の非常に楽しい旅をしたけど、帰る時にどこへ行ったらいいかわからない、帰って行く場所がなくなってしまうたらどうだ？ 全然その旅は楽しくないよね。わが家へ帰る、帰れるという、その安心感。帰る場所がある、保証されている、それが旅をより楽しくしてくれる。食べる塩辛いラーメン、別に美味しいモノを食べたわけでもない。けども、家に帰っていきける、帰る場所があ

る。そこに旅の楽しさがあるんですね。

二番目で言っているのは、今度はどこへ帰るかといっているかと言うと、自然へ帰る。土へ戻ると言うんです、高見順は。自分の帰り場所、人生の旅の終わりには自然へ帰っていくんだと。土に戻っていくんだと。土に入ったらセミに邪魔されるかもしれない。だけどセミの命は本当に短い。それに比べればそれに邪魔されても私はなんともない、ということが二番目の詩ですよ。自然へ帰る。

三番目はどうかというと、今度は大地へ帰ると書いてある。まあ、同じようなものかな。だから高見順さんはこんな具合に、旅に喩えられる人生の終末がはつきりわかってるわけだ。それで安心して死を迎えることができる、そういうことがそこから読み取れますよね。

どうです。みなさん方も帰る場所がしつかりわかっているかな？ 今のところお家へ帰れる、その安心感でもって朝から夕方まで学校で学んで、そしてまたお家へ帰っていくと、当たり前のことになっているよね。もう少しそれを広げていって、あなたの人生が終わる時に、自分は一体どこへ行くのかな？ そんなことはまだ考えてない

摂取不捨の心

よね。でも在学中にはそんなことも考えて下さい。「一体自分は死んでしまったつらどこへ行くんだろう」と。そんなこと考えたら寝られなくなってしまふという人がいるかもしれないけどね。その時に高見順は、家であり、自然であり、大地である、そういう行き先がはっきりわかっている。それで自分は安心して死ぬことができるんだ、という内容の詩でしょうね。行き場所がわかっているということによって死に対する不安と恐怖、これらから免れている、解放されているんですよ。それが大事だね。これが高見順の詩から我々が学べることだと思います。

その次に出しておいたのは親鸞聖人お言葉です。まず『歎異抄』という書物に出てくる親鸞聖人の言葉と言われるものですね。

なごりおしくおもえども、娑婆しやばの縁えんつきて、ちからなくしておわるときに、かの土とへはまいるべきなり

というふうに関親鸞聖人はおっしゃるわけです。死んだら、「かの土」へ行くとおつ

しやるわけです。今生きてるのは、娑婆の世界。この娑婆の縁が尽きたら自分の行き先は「かの土」であると。「かの土」というのは、浄土とか彼岸といわれる世界です。そういう世界へ、自分のご縁が尽きたならば、力無くして終わるときには入っていくんだと。これはいわば死後の世界としての浄土をここではおっしゃってるよね。だけど、その帰る場所は何も、死後の世界だけにある、それが保証されていることによつて安心してゐる、というだけではなくて、現世（現実の世界）においても実は我々は安心してゐられるんだということを詠っているのが次の言葉です。『正信偈』という書物、あるいは「教行信証」という親鸞聖人の一番大事な書物に出てくる文言です。

譬如日光覆雲霧 雲霧之下明無闇

（譬えば日光の雲霧に覆われるれども、雲霧の下、明らかにして闇なきがごとし）

これは、お日様が照ってる。ところがそのお日様の光が、今日は雨だ、あるいは雲

摂取不捨の心

が出ています、霧が出てきて十分にその太陽の光がしっかりと射していない。けどたとえ雲や霧があっても太陽の光によって雲や霧の下が明るいことは事実だろう？ 皆さん方、たとえ雨の日でも電氣をつけなくても歩くことができるよね。「今日は雨である。随分厚い雲が漂っている。しかし太陽が照らしてくれていることは間違いない」という具合に、この例えで教えようとしていることは、お日様、太陽が照らしていただく限りは、私たちは安心していられる世界に今住んでいるんだということです。我々の人生もそうだよ。ひよっとしたらケンカをしたり憎みあったり、昨日は仲が良かったのに、今日になったら一変してガラッと変わってケンカをしたりするよ。そういう毎日を送っているでしょう。日常生活において私の毎日毎日の歩みの中には、そういう雲や霧に例えられるよ。そういうよ。苦しき、悩みがあるかもしれない。苦しき、悩みがあるけれども、しかし、太陽が輝いていることは間違いない。太陽が輝いてくれる、それによって私は守られているんだという安心感、それを親鸞聖人は教えて下さっているわけ。だから親鸞聖人の場合は、死んだ後の世界は浄土とって、自分の行き先はそこで保証されている、確保されている。

そして現実の世界においても太陽の光に喻えられるすべてのものによって守られているんだという。私一人のために本当に心から泣いてくれる人、そういう人によって守られている。それが母であったり、家族であったり、友人であったり、もっと広げていけば、縁もゆかりもない人、考えてみればみんなそういう人によって今の自分が守られているんだという実感ですよ。それがあるかどうか。これは大事だよ。それに気づいた時には安心して、毎日毎日いろんな苦しみが私たちに降りかかってくるけれども、その苦しみを乗り越えていくことができるんだ、と。今お話した詩だとか聖人のお言葉によって、そういうことを我々は理解できると思いますね。

摂取不捨をどこで感じるか —— 信の世界

ところで、この摂取不捨という言葉、先きほども示しましたが(十四頁) 親鸞聖人の『浄土和讃』という書物に次のように出ています。

撰取不捨の心

十方微塵世界の 念仏の衆生をみそなわし 撰取してすてざれば 阿弥陀とな
づけたてまつる

その歌に対して親鸞聖人自身がご自分で注釈を加えるわけね。その注釈というのが
実は今日お話している撰取不捨というその言葉に対する注釈なんです。いいですか。

ひとたびとりてながくすてぬなり

という、そういう注釈を、まず施していますね。

せふ(撰)は ものの逃ぐるを追わえとるなり

せふ(撰)はおさめとる しゅ(取)はむかへとる

そういうふう撰取不捨という言葉親鸞聖人は詳しく注釈していらつしやるわけ

です。非常に良い言葉ですね。「ものの逃ぐるを追えとるなり……」逃げていく人を追っかけていつて捕まえて、そしてまた迎えていく、収めとる、これが摂取不捨という言葉の意味なんです。逃げる人がいればその人を追いかけていつて、そしてまた連れ戻すという精神。これが摂取不捨という精神です。皆さん方はこの京都光華の大学に入つて来られてはやくも一月が終わろうとしていますね。もう京都光華は嫌だと、すぐに退学したいと思つてる人はいませんか。いてもらっちゃ困るけれども。どう？

みんなの中にそんな人いないか？ もしそういう人がいたら、私たち先生も職員の方もみんなを追いかけていつて、もう一度この京都光華のキャンパスに連れ戻しに行きます。いい？ 絶対逃がさないからね。そして皆さん方を一生懸命教育します。これが京都光華の教育精神だ。それが慈悲の心、摂取不捨の心なんです。もしも皆さん方が逃げていくようならば、絶対に追いかけていつてね、捕まえてきますからね。そのつもりでいてくださいね。これが光華の校訓「眞實心」に含まれる内容です。同じように、ここではそういうのが阿弥陀仏の働きとして示されるわけです。阿弥陀仏は生きとし生けるものは全部収めとつて見捨てないという、そういう働きを持っている

摂取不捨の心

というわけですね。それがお母さんに諭えられたり、あるいはまた我々京都光華女子大学の教職員にその働きが要請されているわけだ。

さあ、そうしますと、大事なものは摂取不捨という働きですよ。具体的に我々が実感しているのかどうかという問題です。どうです。ほとんどの皆さん方は実感していないでしょう？ 自分自身にそういう光が放たれている、それで自分の毎日毎日の生活が明るく、そして保証されているという実感がないでしょう？ 何故だろうね。何故そういうことを感じないんだろうね。実はそれが問題なんです。それは結論的には、私自身、この私の命とか、私という存在がどういうものかということに気づいていない。だからこの毎日毎日、生まれた時から降り注がれている摂取不捨の光の恩恵を感じないんだ。実は、結局、私の心の問題なんです。そういうことを感じられるのが、仏教の言葉でいうならば「信心の世界」。信心を得たとか、信心をいただいたとかそんな言葉づかいで表現されますけれども、その信心、心の心境によってそういうことがわかるわけです。

それでは信心って何か。皆さん方、信心という言葉を聞くと、信仰という言葉と同

じ意味で使われるかもしれないけれども、仏教ではあんまり信仰という言葉は使われないね。信心という言葉の方が多く使われる。信心というのは基本的に、その漢文に出しておきましたように、「心を澄浄にする」というんです。それが「信」というものです。心が澄浄って何？ 漢字で書く通り、心の状態が澄んでくる。喩えて言えば、池にお月さんの姿が映っているんだけど、その池はさざ波一つ立たないような、平靜な清廉な、そういう状況ではお月さんがまるまる映るでしょう。ああいう静けさ。それが澄浄という言葉の内容です。だから心がそういうふうには動揺しない。いつも平靜になっている。それが信心の世界。だから決して信心というのは情熱的になつていくというのとは全然違います。仏教の場合は、その点を間違えないように。心静かな状態になつていく、それが仏教の信心ということなんです。そうするとその心境にどうしたらなれるかというところ、それが先に言いましたように、お互いが自分の真の自己、自分の本当の姿に気づくと、心が澄浄にならざるを得ない。心が澄浄になると、あんまり自己主張をするとか、オレが、オレがといつて我を張る、そういうことをしなくなるんです。それが心の澄浄、信心を得た境地、心の状態ですね。

摂取不捨の心

それでは真の自己というのはどういうあり方なのかということをご二つ挙げておきました。一つは、私という存在が「縁起的存在」、「無我なる私」、そういう自分に気づくかどうか。もう一つは「罪悪深重」という私に気づくかどうかということなんです。どうも難しい言葉が出てきましたね。これをもう少し今日は説明しようと思います。

「縁起的存在」なんて言葉は難しいよね。皆さん方が縁起という言葉はどういう時に使う？ 今の皆さんだったら、縁起が悪いとか、縁起が良いとか、あるいは何々神社の縁起絵巻物、縁起物：そんな言葉でしか使わないだろう。ところが、縁起という言葉は仏教の教えの中では一番大事な言葉、用語です。意味はこの漢字に書いてあるとおり、「縁って起こる」という意味なんです。これが縁起という言葉の意味です。これは一体どういうことなんだろうね。

そこで私たちの自分、お互いの命をまず考えてみよう。この私の命はどうして成り立っている？ まず、お父さんお母さんがおられた、それから賜った命だね。そのお母さんお父さんは、おじいちゃん、おばあちゃんが居ったればこそ賜った命だった

よね。私は見たことも口をきいたこともないけれど、私に曾祖父さん、曾祖母さんがおられなかったならば、今の私はないよね。という具合に、私の命のルーツを辿っていくとどこまで遡っていく？ 始めはわからないだろう？ 始めがわからないぐらい、遙かずーつとかなたの昔、過去に遡っていく。そういう深い長い歴史があつて、初めてこの今の自分の命が与えられているんだなあと、認めざるを得ないでしょう。さらに、私が今ここで何をしゃべり、どういう行動をとるかということとは、そっくりそのまま子どもに、あるいは孫にまで伝わっていくだろうな。そうすると、私の命というけれど、その命は縦の軸というのかな、時間の概念で言うならば、脈々と繋がっている、その中のほんの八十年、六十年でしかないよね。そういう深い長い歴史を持つて今の自分がある。さらにそれを未来に展開していく、そういう命でもあるということが一つ言えるね。さらに、今は縦の関係で言っただけでも、横の軸でみたらどうだ？ 兄弟がいる、親類の方々がいる、友だちがいる、町内の人たちの付き合いがある、あるいはご商売の方ならお客さんとの繋がりが、関わりがある、あるいは家で飼っているペットと私の繋がりが、範囲を広げて私と自然環境との繋がりが、関わり合い、そ

撰取不捨の心

ういう、いわば私にとつて他者なるもの、他者とのそういう繋がり、関わり合いというのを否定してしまつたならば、この今の私はあり得ないよね。それはわかるでしょ。そうしたら「私の命」なんていうけど、この私の命は時間的にも空間的にも、無限の過去から、そういう深い長い歴史があつてあらしめられている。その場合には目に見えるものだけじゃなくて、目に見えないものとの繋がり、関わり合いによつて初めて今の自分があるんだなということに気づかざるを得ないよね。そしたらそこにおいて、オレが…とか、私とは何ぞやという、私というもの、固定的な、実体的なあり方なんていうのは認められないよね。あくまでも他の物との繋がりの中にしかあり得ないのが、この私という存在なんだなという、それを縁起的存在というんです。

しかも私の命というけど、お互いどうですか？ 何をもつてみなさんは自分の命だと考えている？ これこそ私の命だと言えるものは何だろう。心臓の働き？ あるいは脈拍？ これは確かに私の命の証だと思います。それが私のものだとするならば、私の心臓だから私が自分の心臓を自由自在に鼓動させることができますか？ できな

いでしょう？　もうだいぶ長いこと働いてくれたから、少し休ませてやりたいと思っても、休まずことできないよね。そうであれば、そんなものを「私のもの」なんて所有格で呼べるかね。呼べないじゃないかな。そういうのを縁起的存在。他の物との繋がり、関わり合いの中にしか私という存在はあり得ないんですよ、ということをお教える。それが「縁起的存在」というあり方なんです。それを別の仏教的な言葉で言うならば、「無我なる存在」。「オレが…」、「私が…」と思っている、主体的な存在があると思っている。そんなもの考えれば考えるほど、これこそ私だと言えるものが一つも見出してこれないよね。そういうのを無我なる存在というんです。この「縁起的存在である」というのが真の私ということの内容だな、一つは。

もう一つ、真の私はどんなものであるかというならば、「罪悪深重」という言葉で表される存在。罪悪、罪つみと悪あくです。それが非常に深く重いというんです。たぶんここにいる皆さん方の大半は、自分が今罪を犯している、悪を犯していると思っていないでしょう。本当かな。本当に皆さん方は全然罪も悪も犯していませんか？　ちょっと考えてください。仏教では五悪といって、五つの悪いことがあるんです。一つは、殺

拱取不捨の心

生。それから盗み。三番目は邪姪。四番目が妄語。五番目が飲酒おんじゆと云うんです。殺生、これは生き物を殺してはいけないという意味です。盗みはわかるね。邪姪というのはよこしまなセックスだ。乱らな性関係を持つちやいかん。妄語、これはウソを言っちやいけないということです。最後は飲酒。これはアルコールを飲んじやいけないという…、これはちよつと厳しいなあ。いずれにしてもこの五つの悪をやっちやいけないというわけですけれども、どうでしょう皆さん方、本当にこの五つのうち、一つもやっていないと自信持つて言えますか？ まず第一、殺生をしないこと、守れてますか。殺生の生は生き物だよ。生き物を殺しちゃいかん。それは仏教の場合は、さつき言ったように、有情とか衆生ということが生き物の内容。ということになれば、人間だけでなくて、他の生命あるもの、これみんな生き物だぞ。その生き物を殺しちゃいかんというんでしよう。仏教の教えでは。できないんじゃない？ 毎日毎日僕たちは肉はいただくは、野菜は食べるは、魚を食べるは…。そういうものを食べないことには私の命が維持できないでしょう？ だから自分の命を維持するために、毎日毎日私たちは殺生を犯しているんですよ。そういう自覚はどうですか、皆さんあります

か？ 生き物を殺さずしては皮肉なことに、恥ずかしいことに、私は自分の命を維持できない。これが私という人間の本当の姿なんです。そういうのを罪悪というんです。あるいは、ウソを言っちゃいかんというわけです。皆さん方、ウソをつかずに毎日生活できますか？ ウソも方便という言葉がある通り、暑くもないのに、相手が「今日は暑いですね」と言ったら「ああ、そうね、暑いね」って言っちゃうでしょう。毎日毎日ウソの言いつばなし。だからそこに挙げておきました、相田みつをさんという人がこういうことを言っているんです。

うそはいわない　ひとにはこびない　ひとのかげぐちはいわぬ　わたしにはで
きぬことばかり

とおっしゃってるね。まさにこの通りだよ。そうしたらどうだ？ ウソを言っちゃいかんといっても、私にとっては一つもできることじゃない。できないことばかりだ。そうしたらこうした悪を毎日毎日犯しているということ。そうしたらそん

摂取不捨の心

な私はまさに「罪悪深重の私」としか言いようがないと違う？

私という存在のあり方が他のものとの繋がりの中にしかあり得ない。そして毎日毎日こうして生活させてもらっているけれども、そこに見出せる私は罪を犯さずしては、悪を犯さずしては生きることができない、そういう私だというのが、自分の、お互いの、本当の姿なんだということに気づいたら、どうなりますか？ そんな私なのによくもこうして存在することができると。もつと言うならば、よくもそんな悪を犯し、罪を犯している私なのに、生かしてもらっているなあと、そういう気持ちにならない？ だから普段私たちはね、「私は生きている」という日本語を使うけれども、仏教の立場から言うと、これは間違った日本語だな。私がいつも言うように、私たちは生きていくんじゃなくて、生かされている存在です、というふうに受け止める。そんな考え方を今までにしたことあるかな？ 自分は、自分が努力しているから、頑張っているから、だから私はここに生きているんだというふうに思っておられるけれども、よくよく考ええると、それは極めて傲慢な考え方だね。万事が万事、生かされている存在でしかないというかな。ちょうど今、大学の校門の掲示板見てごら

ん。何て書いてある？「生かされている私に感謝」ってあるだろう。そのことですよ。この自分という存在はまさに、全てのもの、他のものによって生かしていただいているんだなあ、生かされているんだなあ、と、そういう私が見えたならば、そこにどうという具体的な姿、行動が出るかな？それは頭の下がった姿でしょうね。我々人間は、頭を下げることはできませんよ、いくらでも。自分の都合のためならいくらでもペコペコ頭下げますよ。でも本当に心から頭が下がるというのはなかなか難しいよね。どうして頭が下がるか。それが今お伝えしているように、本当の自分の姿がわかってくれば、自ずから自然に頭を下げざるを得なくなる。それが無我なる存在のあり方、無我的なあり方なんです。いいですね。

そこでもっと仏教的な用語を使うならば、そういうふうに分が「縁起的な存在」であるということが、自分の本当の姿がわかってきた時には、心が澄んでくるんですよ。あんまり自分勝手な自己主張ばかりしちゃいかんな、と。皆が一生懸命話を聞いているのにべちゃべちゃしゃべって他人に迷惑をかけちゃいかんな、と。そういうことはすごく恥ずかしいことだなということがわかってくる。それが自然の姿だろう。そ

攝取不捨の心

ういうことがわかってくる、それが真の自己の発見なんです。そういう自分が見えてくると、心の状態も平靜になってくる。それが信心というもののあり方なんですよ。だから今日お話している信心というのは、もう一つ別の言葉で言うならば、「自力」ということが否定された心の状態です。何か普段毎日私が努力しているから、私が頑張っているから、今こうしてあるんだと思っっている、そういうのを自力って言うね。自分の力でもって何でもできる。そういう自力ということが、自分の本当の姿がわかってくると自ずから否定されていく。他力でしかないんだということなんです。それが大事なんです。そういうふうにして、罪悪深重な私とか、自力というものが無効になってくる。そういう時にですね、初めて仰がれてくるのが先ほどよりお話している攝取不捨という働きなんです。慈悲の働きがわかるのは、今言いましたように、真の自分がわかった時に、自ずから、「あ、そんな私なのに、こういう私をこうしてあらしめていくれる」と、そういう「大きな働き」がある、あるいはそういう「大きな願い」があるんだなということに気づかされるわけですね。ですから「攝取」と、今お話している「信心」という言葉は、攝取というのは仏様の立

場から言った言葉だと言っていいでしょうね。それに対して信心というのは、この我々、衆生の側の立場だと言っていいね。そうすると摂取不捨ということが本来に働いているなあと気づくのは、私の心が澄んできた状態、澄浄な状態になっている。心が得られた状態になっている時にその摂取という働きがわかってくる。つまり仏の働きがわかってくる。そういう自分がわかればわかるほど、「ああ、こんな私に対して摂取不捨という働きが、いついつまでも、昔からずっと今に至るまでも働いていてくれるんだな」と、「働いていてくれたんだな」ということに気づくわけですね。そこにこの「摂取」という働きと、「信心」という心境はお互いに時間的には同時に相関関係で成り立つものなんだと言えるんじゃないでしょうか。

まとめ

ですから、生かされている私、あるいは守られている私ということが、自分自身の身の上でわかってきますと、そこに自ずから「お陰様」とか「ありがとう」という感

摂取不捨の心

謝の気持ちから出てくる。それがつまり頭の下がった姿ということだろうと思いますね。そういう世界というのが「仏凡一体の世界」だというふうには仏教では教えているわけです。ですから、この本学の校訓の真実心というのは何回もお伝えしてきたように、慈悲の心であると。慈悲の心は思いやりの心であると。それを今日は摂取不捨の心という言葉でお伝えしたわけでありますけれども、この我々お互いはまさに「摂取不捨」という働きに生かされて生きています。それを仏教では阿弥陀仏の働きと言っているわけです。そういう仏の力によって、「この今の私がこうして生かしていただいているんだなあ」ということに気づかせていただく、それが大事なことでしょね。ですから皆さん方も本学において一生懸命勉強して、しっかりと知識、技術、技能を身に付けていただきたい。それと同時に、一方では自分の本当の姿に一刻も早く気づいていただきたい。そうすることによって、友だちの関係も、あるいは毎日毎日の日常生活もより充実してくる。内容が豊かなものになってくると思います。ですから先ほど言ったように、母親の愛情とか、あるいはもっと広げて言えば、私一人のために泣いてくれる人がいるんだなあ、そういう人に一刻も早く出会

つてもらおう、探し出してもらおう、つていうことをしていただきたい。そうすることに
よって安心して毎日毎日の大学生活をすることができると、私は思っております。

ですから、どうか、これからの二年間ないし四年間をですね、そんなことを頭に置
いて充実した大学生活を送っていただきたいということをお伝えしまして、今日の
講話を終了させていただきたいと思えます。

参考書

稲葉秀賢「撰取不捨の世界」(『真宗教学の諸問題』所収) 稲葉秀賢名誉教授喜寿記念刊
行会、昭和五十四年

松原哲雄「深く生きる」東本願寺出版部、昭和五十九年

——二〇〇八年四月二五日——